
樹木葬の咎

縁咲 璃夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

樹木葬 の咎

【Nコード】

N0248G

【作者名】

縁咲 璃夜

【あらすじ】

田舎の魔法教育機関に通う少女、ルリーナはただ平々凡々に暮らすのが望みだ。ところがそんなある日、養い親が急に首都へと移り住むという。幼馴染との別れが辛い彼女だが、渋々承諾して首都へと向かった。その決断が彼女の人生を変えとも知らずに……

序章 禁断の夜

その日は雨が降っていた。風も唸っていた。

立つのがやつの丘の上で、普段は誰も近づかないこの場所に人影があつた。

木々が周囲を覆い隠している丘の上には一本の樹木が誇らしく立っている。樹齢数百年を超えているだろうこの樹木は神木とも拝められている。

空は雲に覆われ、すでに闇色に近い色を醸し出している。

「ごめんなさい」

女性の涙ぐんだ声が何度もその場に響いた。か弱い声とは裏腹に声の芯ははつきりとしていた。彼女に追い打ちをかけるように雷雲が唸りを上げる。

震える腕を片方で抑えて『ごめんなさい』という言葉を繋ぎながら、彼女は何かを描いていた。

傍らには赤子が泣け叫んでいる。

嵐もそれと強調するように荒れ狂っていた。

手が動くごとに金光りはじめる地面、その光はすでに樹木を囲んでいる。樹木だけではない、この丘の全体にして輝き満ちていた。

暗黒な世界と不適な色。それを拒もうとしている。世界は彼女を受け入れようとはしない。

だから、彼女は実行にかかったのだ。

「私の命に代えても、この子だけは」

彼女の手が動きを止める。

数日間、睡眠をとることもなく書き描いた、それは。

「世廻る血に契を吾に」

金光が地面から宙へと浮き上がる。

それと同時に彼女は樹木の外へ、最後の力を振り絞って走った。それも、

赤子を残したまま。

円陣の中にいるのは、生まれて生後半年も経っていない泣くだけの赤子。

その赤子を包むようにして、巨大に描かれたそれは徐々に狭まり赤子だけを囲んだ。

彼女は下唇を噛みしめた。血が滲む。

『禁忌の魔法陣』

それを自分が使ったなど思ってもみなかったことだ。だが、もう後戻りはできない。

「吾の御魂を刻み此処に禁約す」

刹那、凄まじく放つ光とともにその丘全体を包み込んだ。

荒れ狂った空は暗雲を飲みこみ、無数の星やらで満天の空を映し出している。

轟音も静寂となった。

そしてその最後の光線が消え去った時には、彼女の姿はこの世の何処にもありはしなかった。

残された赤子は口に指をくわえて、安らかな寝息をたてていた。

赤子がこの世から受け入れられた瞬間だった。

『始まりの夜』

序章 禁断の夜（後書き）

どうも、縁咲璃夜でございます。

『序章』ということで始まりました、が！まだ、どういつ内容にしようか決めておりません。

恋愛要素を入れようとは思っている私ですが。恋愛も熱くしたこともない、この私に書けるのでしょうか……？

ゴッホン。ま、まあ、それはさておき……頑張っている作品にしたいと思っておりますので、応援して下さい方は何卒、宜しくお願い申し上げます。

恥ずかしながら、字の間違えがあつた場合など『ああ、この管理人は多分こんな感じで書くこと思ったんだな』っと思つていただき、スルーの方向でお願いします。

第一章：和やかな日常

「専攻なにするのか決めた？」

湯気が上がる珈琲に硝子瓶から角砂糖を一つ取り出そうとして、やめた。

がやがやとした賑やかな食堂、この時間この施設で最も人口密度が多くなるのはいつものことだ、声を掻き消されないように目の前に座っている彼女は声を張りあげて言った。

「俺は攻撃魔法系」

彼女の左隣に座っている赤毛の男は自慢げに言い切った。

「マーブル、あんたには聞いてないの」

窓から入ってくる日差しが、このフロアを体温を温める。冬近くだというのに、空はカラリと乾いていた。

珈琲が入ったカップに唇を近づけて飲もうとした、だが舌に珈琲が触れた瞬間、反射的に口から離れた。

「あつ、熱い！」

少しばかり大きな悲鳴に、丸い卓子^{テーブル}を囲んでいた三人のうち二人の視線が、一人に集まった。

二人は見てから、ため息を同時に吐いた。

「ルリーナ……お前は極度の猫舌なんだろう？考えもなしで注ぎたての珈琲をすぐ飲むかー普通」

「ホントよ。あんたは五分経ったって『熱いつ』てホザク究極な猫舌なんだからさあ」

卓子には無残にも珈琲が広がっている。その珈琲もじわじわと面積を増し床に滴るまでには、そう時間は掛からなかった。

床に落とさなかったことが難を得たのか、カップはなんとか割れずに済んだ。

ルリーナは倒れたカップをもとに戻すと、二人を軽く睨んだ。

「私は猫舌じゃないから……ただ、舌が熱さに弱いだけで」

そう言いきって、ルリーナは布巾を取りに行った。

そして残された二人は深いため息を吐いたのだった。『それが、猫舌なんだ』と心の中で呟きながら。

「エンリ、手伝ってくれてありがとう」

珈琲で汚れた卓子と床を丁寧に拭き取ると、ルリーナは微笑みながら言った。

まだその場に珈琲の匂いが鼻腔をかすめるが、そのうち消えるだろう。

ルリーナは床から立ち上がると、片手を天井に伸ばしもう片一方の手を頭にもっていき大きな伸びをした。

そんなルリーナを不服そうに見ているマーブルの姿あった。彼は椅子の上で胡坐をしている。

「おいおい、俺にはお礼ーはないのかよ？」

ルリーナはマーブルの視線をかわしながら流し台へと数枚の布巾を持っていった。

食堂のフロアには人が数が減って、今では数人しか残っていない。ルリーナは咄嗟に振り返り、各フロアに必ず設置されている時計を見た。そして徐々に焦りを覚えて声を出そうとした、だがそれよりも早くエンリの声がフロアに響いた。

「ルリーナ、もうすぐで授業が始まるわよ！マーブルも早くっ」

授業に遅れないように急いで、三人はその場を後にしたのだった。座っていた卓子はギラギラと光る太陽に照らされ綺麗に輝き満ちていた。

雲一つない空を眺めていたら、一羽の鳥が視界に入ってきた。

風通しがよい窓側の席を取れたのは運が良かったと思う。

黒板い書きあてられるチョーク音が心地よく耳に響き、窓から入ってくる爽やかな風が髪を揺らし頬にあたる感触が少しくずぐずいい。

頭が上下に揺れ動く、必死に意識を持たせようと試みるが、そう長くも続かず卓子に頭が近づいた。

『ルリーナ、お前も他の者たちと遊んだらどうだ？』

裾を掴んだ手を離さずに、ルリーナは背の高い彼から視線を下へと変えてそっぽを向いて拗ねた。

近くにあった石を遠くで楽しそうに集団で遊んでいる子供たちめがけて、軽く蹴った。だが、彼らはそんな自分の存在も気付かずに笑顔で遊んでいた。

『いやっ、私はここにいる』

小さな手が裾を握る強さを強める。

『…遊びたいのдар？何故、拒む』

彼はため息を付くき、しゃがみ込んだ。視線がルリーナと同じになる。

ルリーナの頬は膨らみ、子供たちをいつまでも睨んでいる。その膨らみ面を彼は自分の方に向かせた。

彼はルリーナのその表情を見て眉をしかめる。

『テルさま…私はもう家にかえりたい』

彼はその言葉に困った様子もなく、ルリーナが握る裾の手を放させ、子供たちの方向に体を向かせた。まるで『遊ぶまで帰ることは許さない』というように。

『行くんだ、ルリーナ』

彼はそう言つて木陰の方に歩きだしてしまふ。ルリーナは追いかけてたいにも追いかけられずに、ただ場に立ちつくした。

「…ナ…ルリーナっ！」

怒鳴り声が聞こえてルリーナは何が何だか分からず、立ち上がった。その途端に笑いがどつとフロアに響いた。

ルリーナはまだ状況が理解できず、笑っている同期の生徒たちを見た。その笑いの中にエンリとマーブルの姿もある。

「ルリーナ！貴女は授業にも遅れ、授業中に寝るなどと私を馬鹿に

しているのかっ!？」

先生の怒鳴りに生徒の笑い声が減少する。そしてルリーナは我に戻り、後悔し始めた。

(…どうして、寝ちゃったんだろ……それにマテリア先生のとくに限って)

マテリア・クリツテといえば鬼教師として有名。そしてこの田舎町、ローテラの名物でもある。目を付けられたら最後、生徒は嫌というほどお叱りを受けるのだ。また、ルリーナも目を付けられた生徒の一人である。

「ルリーナ、貴女は毎度毎度…私を嘗めてるのか?そんなに叱られるのか?」

「いいえ…そんなことは」

「黙りなさい!ルリーナ・トリペック、貴女は放課後に私の元に来るように」

前後撤回、窓側に座ったのは運が悪かった。まさか、こんな事態になるなんて…。

ルリーナは前科がある。確かこの前は草むしり、その前は原稿用紙30枚の反省文だった気がした。

「では、今日はここまでにする。明日は課題を必ず持ってくるように」

ちょうどいい具合で授業終了のチャイム鳴る。

ルリーナにとっては地獄のチャイムが鳴った瞬間だった。

舞い上がる埃、鼻をかすめる黴カビの臭い、目の前には大量の魔法道具ガヤラが置いてあった。

古惚けた分厚い本や怪しい指輪、腕輪、装飾品の数々。魔法に携たずさわる者ならばお目にかかりたい品物だということは一目瞭然だったが、ルリーナにそんな好奇心も興味も湧いてもこない。逆に何故こんなモノが欲しがるのか不思議になるぐらいだ。

彼女は埋もれて埃被っていた資料の端を摘みながら、決められた箱に無造作に入れた。

「なあ、何で俺たちまで付き合わねえといけねーんだよ。めんどくせい」

隅から出てきたマーブルが文句を言った。文句を言いつつも、手には大量に入った魔法道具が入っている。

「マーブル、手を動かさないよ！進まないでしょ」

エンリがルリーナの背後で手を動かしながら、文句をいうマーブルを嗜たしなめる。彼女の方は何やら機嫌が良いらしく、好意的に作業を

進めてくれているのが感じられた。

「なんだよ、エンリだって呼ばれたとき嫌がってたじゃねーか」

ルリーナの隣に胡坐をかいて箱を逆さまに返した。

「二人ともごめん……嫌だったら、」

「うるさいな、嫌だったら倉庫^{くら}まで来ねーって」

「マーブルの言う通り、それに倉庫に入れるなんて嬉しい限りよ！
あーもうこの場にあるもの全部、貰いたいわ」

エンリの目がきらきらと輝いている。

「しっかしさー、よくもマテリア先生がこの入室許可を許したな
……まあ、出た瞬間に身体検査されっけど」

マーブルが後ろに倒れ、埃の被った床に寝ころんだ。
倉庫の中はひんやりとして少し寒い、体にとってもこんな埃まみ
れのところにいつまでも入れば良いとは言えない。早めに片づける
ことに越したことはない。

「今日で終わるかな、コレ」

ルリーナがそう言えば、二人は『さあ』といった具合で目で合図
して首をかがげてくる。

『倉庫を歩ける程度でいいから掃除しろ』マテリアが言ったのは
それだけだ、倉庫の中をすべてとは言われていない。そして『今日
遅れた二人と一緒にでもかまわない。しっかりやれ』と言われた。初

めはこんな簡単な罰で良いのかと思ったが来てみれば、裏を返された。やっぱり、鬼教師だ。

倉庫は既に雪崩状態、どこから手を付けていいのかさっぱりだった。今日中に片づけられないとなれば、明日に繰越されるのは分かっている。

「無理だな…それに今、外は暗いと思うぞ。ここ地下だからわかんねーけど」

三人が此処に来てから、だいぶ時間が流れた。それぞれ没頭していたせいか気付かなかったが。

「おい、俺たちはいいけどさ…ルリーナ、お前は平気か？保護者様が心配してんじゃねーの？」

『あ…』ルリーナとエンリが思い出したように呟いた。エンリまで呟いたのはルリーナの保護者を知っているからだ。

ルリーナは唯一の家族である、テル・トリペックの姿が頭の中で過ぎる。

（そつえば、懐かしい夢を見たな……）

あれから何年の月日が流れただろうか。
だが、今はそこではない。

「…どうしよ……テル様に怒られる」

その場で頭を抱えてながら、今後起きることを推測してみる。
一回だけ、何も言わずに遅くに帰ったことがあった。っといって
も決められた時間から数分しかしかまだ過ぎていなかったただけだ。

彼はいつも優しい。だから、あの日は日常のギャップの違いさにルリーナは恐怖を覚えている。

「ルリーナ、今日は早く帰りなよ！あと片づけは私たちがやっとなるから」

「えー俺もかよ！めんどくせーな」

マールは文句を言いながらも手助けしてくれることをルリーナ知っている。

数年前のあの時までには、それぞれの存在を気にしたことも話したこともなかった、私たち三人。

顔を合した時だって、まさかこんなにも心の内を話せるようになったり、信頼できるようになるなんて思ってもみなかったことだ。

でも、時間の経過とは恐ろしいもので、今では他人と変わらない友達のように接しられるようになった。

「ありがとう」

ルリーナは二人にお礼を言うと急いで倉庫を後に、飛び出して上階へと続く階段を駆けだしていった。

第一章：和やかな日常（後書き）

ここで『登場人物』 登場した際に書かれていきます。

●ルリーナ・トリペック 性別：女 年齢：16歳

○マーブル・チョコレル 性別：男 年齢：17歳

●エンリ・ロードメイ 性別：女 年齢：16歳

○マテリア・クリツテ 性別：男 年齢：43歳

私の養い親

幼い時は体が弱かった所為せいかもしれない。

いつも心配をかけてばかりで、安心させたことは記憶は一切ない。何処かに出かけるたびに何か事件を起こしてしまう自分をよく咎めたのを覚えている。

別に注意を引きたいとか、そういう疚やましい気持とかあるわけでもないのだが。

夕日が沈み、次第に寒くなっていく頃合い、ルリーナは大きく息を吸った。

森林に囲まれた田舎町。いや、村でも十分に通じるだろう。

自然が豊で肺に優しい、新鮮な空気。

ローテラは魔法国ユライアの西南の地、隣国の境を示すメーティア川の近辺にある。

肥沃な土に恵まれ、農業が盛んな地域。だが、町の人口は年々減少の一方を辿っている。

そんな町に王は魔法教育機関を設けた。

農家の後継者の問題にしろ、魔法教育機関を創立することには万々歳だ。なにせ王都からの支援を受けることができるのだから。

過疎地域であるローテラには次第に若者が増え、現在は人口も経済にも発展を遂げはきている。だけど、田舎町という雰囲気だけは抜けない。どんなに発展しても道路や新しい建造物を建設しても、それはきつと消えてはくれないだろう。その理由は町民の性格にある。の

ローテラの町は平和ボケしている節がある。何百年も争いごとに巻き込まれていない所為かもしれない。だから温厚な性格を持ち備えた人がほとんどで、そんな彼らに他地域から来た者たちは少なく

とも影響される。

“田舎町”というのは平和ボケした町民の親しみやすさに繋がっているということだ。

鞆の荷物を整い終えて、ルリーナは腕時計を見た。

「あ、もうこんな時間…！」

紫青が空一面に広がり、人家に明りがぼちぼちと灯り始める。

町一の丘に聳^{そび}えるローテラ国立魔法学校の校舎からは綺麗な景色を観望することができる。

寂しい雰囲気が漂う中に無数の灯火。まるでそれは蛍のようだ。

教科書などが入ったリュックを両肩に通し、すぐさま校門へと駆け足で向う。

校舎にはまだ職員たちが残っているのか、明かりがついている。校門を抜ければ、次は地獄の階段がルリーナを待っていた。

「はあ…この階段は何段だったけな」

唯一、学校に繋がる道。それは過酷な修行場でもあった。

上から下へと続く長い、それも数百メートルも続くだろうと思われる階段。何故、こんな高い場所に学校を建てたのか。というより生徒にとっては迷惑極まりない。この学校の職員だって口にはしないが思っているはずだ。

朝、寝坊したら最後この階段を前にしては遅刻は確実だ。目の前に校舎が見えていても、この階段を上らない限りは…。

「上りはいいんだけど…下りは足腰にくるからヤダな」

とは言ったものの、渋々下りはじめる。

急降下に近い階段は何人も重症者を出したと聞いている。それはそうだろう、一歩足を踏み外せば軽し怪我だけでは済まされない。だけど今のところ死者が出たとは聞いてはいない。

いくら急いでいるとはいえ、この階段では慎重になる。ルリーナは数週間前に新しく設置された手摺りを滑らせながら階段を下った。半分ぐらいまで下り終えて、立ち止まった。

「何…？」

一瞬、切れるような音がルリーナの耳を翳めた。それは動物の声のようであって、何か違う音。

辺りを見渡すが、今下りている階段には人気はない。両脇に生えている木々も至って変わらないし、異変もないが…。

「ひゃ……何!？」

何かの黒い影がルリーナの前を通り、反対側へと移った。目で追うが、黒い影は木々の茂みに隠れてこちらからは見れなかった。

あまりの恐怖にルリーナは唾を飲み込んだ。手足はいつ震えてもおかしくない。

ルリーナは警戒の色を濃くした。

「ガールルウ」

低くて図太い唸り声に驚いた。

ルリーナは後ろに飛び退き、尻もちをついた。そしてその黒い影が姿を現す。

（…な、なんで野生のチーガーがいるの！？）

『チーガー』といえば絶滅危惧種ぜつめつきぐしゅに指定されている動物だ。現在では国の規定で保護し管理している。そんな本の中でしか見たことがない動物が何故か白い牙を見せながらこちらに向かって唸っている。

それに『チーガー』は獰猛な動物だと習ったが、すでにルリーナの青白い肌には、冷たい汗がにじみ出ている。

「ガールルルルウ」

『逃げる』、その言葉が頭の中でこだまする。しかし腰が抜けて立ち上がることができない。

チーガーのいつ何時でも襲いかかってきそうな雰囲気、ルリーナは全身を抑えつけた。

ガタガタと震える体は一向に止む気配もない。いつもは冷静なルリーナもこの時ばかりは焦っていた。

チーガーがルリーナ目掛けて飛び上った。

「星の刃・切り裂け！」
ティアー・ブラッドスター

聞き馴染んだ声、落ち着いた高くも低くもない音程はいつもルリーナを安心させる。そしていつも助けてくれる。

「テル様っ…！」

今は家にいるはずなのに、その彼の姿を見てルリーナは叫んだ。彼は急いで階段を上ってきたのか、息が少し上がっている。

「だ、大丈夫か…？怪我はない、な」

テルはそう言うと、ルリーナの傍らでピクリともしないティーガーを見た。

死んだのか、それとも気絶しているだけなのかわからないが、その場に血痕をばら撒き倒れている。

「何故、ティーガーがいるんだ…？」

「わかりませんよ……これ絶滅危惧種ですよね」

テルはルリーナに近づきながら、自分の羽織っている黒いコートを脱いだ。

「おい、寒いだろ……これ着ろ」

ルリーナの服装はこの学校の指定された制服を着用している。

生地が柔らかく、魔力の調整をする特別な素材でできている制服。時には魔法をも防ぐ効果があるとかないとか。魔法を受けたことがないため知らないが…。

そういわれている割には肌触りは良いものの、風を通しやすくなっている次第だ。だからこの冬近い季節には寒い。

上着を着ればよいのだが、それは学校側で禁止。なんでも制服の効果を減少させてしまうらしい。

「…ありがとうございます」

断ろうと思ったが彼は有無を言わせないで押し付けてくる。だからいつも承諾してしまうのだ。彼だって寒いだろうに…。

「あの…どうして来たんですか？」

テルは長い銀髪のを搔きあげた。

「あ？ああ、お前が遅かったから迎えにきたんだ…そしたらこの様だ」

ティーガーを見ながら彼は口を開いた。

その横顔をルリーナは見た。

靡く銀色の髪、透き通る肌、青緑の瞳、長い睫毛、整った鼻に口…。

（…ああ、勿体ないな……せつかく整った顔をしてるのに）

彼に好意を寄せる者は山のようにいる。というか町に住む独身女性が全員とっていいほど、彼を狙っている。

（それなのに……子持ちで良いのかな…？）

テルとルリーナは親子関係。といっても養い親と養い子であるが…。

だが、親子というより兄弟だ。何せ、年齢差はたったの七つ。

ルリーナが今年で16歳ということは、彼は今年で23歳である。何とも若い父親である。

そんな彼に最近、ルリーナは気を使おうと必死だった。

学校の休日にはエンリやマールを誘って遊びに行ったり、商人の若娘の所に『あの店は安くて、いい品があるんだよ』とか言って買い物に仕向けたり、時にはテルに好意を寄せる女性と手を組んだり、とにかく色々とした。

だけど、すべて失敗。いや、養い親は女性に興味がないのかもしれない。

子供心としては、早めに奥さんを見つけてほしいのだが。まあ、そうなった場合は立场上、私は自立を余儀なくされると思う。また、それはそれで悲しいのだが…。

「何だ？俺の顔に何か付いてるか…？」

ルリーナはハツとなって顔を背けた。どうやら考え更けていて、じっと彼を見ていてしまったらしい。

「別に何でもないです…あの、ソレどうするんですか？」

「どうすると聞かれてもな……そうだな、食うか…？」

は？って感じで彼を見れば『…冗談だ』と返ってきた。彼はいつも真顔だから冗談が本気で聞こえてしまう。

「まあ、後で俺の方から町長に連絡しておく……こんな気味が悪いところは好かぬ、帰るぞ」

テルはそう言って階段を下りはじめる。

「ま、待って…」

麗しい顔が振り返った。

「どうした」

ルリーナは次の言葉を嚙み躊躇った。

呼び止めたくせに何もしゃべらないルリーナに眉を寄せながらも
う一度、彼は聞いてきた。

そして顔を赤らめさせながら、ルリーナは口を開いた。

「こ、腰が抜けたんです……」

私の養い親（後書き）

○テル・トリペック 性別：男 年齢：23歳

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0248g/>

樹木葬 の咎

2010年10月28日03時29分発行